

「ニューギニアで眠る叔父」

石井 れい子さん (昭和 29 年生まれ)

私は、今から 11 年前に政府派遣の慰霊巡拝の旅で、姉と 2 人でニューギニアへ行ってきた。現地での移動はほぼ小型セスナ機だったが、海をボートで往復移動する事もあった。

それは 8 日間の旅でホテルが 3 回変わったが、最後に泊まったホテルは翌日、合同追悼式が行なわれる、『ニューギニア戦没者の碑』という、ニューギニアやその周辺海域で戦没したすべての人達の霊をなぐさめるために建設された、厳かな建物がある場所の近くだった。その追悼式当日は、どこまでも青空が広がったとてもいい天気で嬉しかったが、私は式の間中、いまだに遺骨が故郷に戻らずこの国のジャングルの中で 70 年近く眠り続けている叔父の無念の思いがこみ上げてきて、ただただ泣き続けるばかりだった。

写真でしか知らない叔父だったが、おばあちゃん子だった私は、祖母が口癖のように、『息子は戦死したと言って白木の空箱で帰ってきたが、ニューギニアのどこかできっと生きてはいるはずだ。』と言っていたので、自分が大人になったら叔父を捜しにその国へ行って祖母を喜ばせてあげたいなと思っていた。

そんな夢が大人になって本当に叶い、訪ねた叔父の最期の地は、『生きては帰ってこられないニューギニア』と言われたほどとても過酷な所だった。

あの時代、国から届いた 1 枚の赤紙で、叔父をはじめ、たくさんの人達が国や親やきょうだいや妻や子供を守る為にと行って亡くなっていった無念の思いを無駄にしない為にも、私達は今のこの日本の平和を守り続けていかなければいけないと強く思う。

私がニューギニアへ行けたのは、叔父が南方の地で私がくるのを 70 年近くも待っていて、戦争の悲惨さや残酷さを私に伝えて、もう二度と戦争はしないでほしいと私に言いたかったのだと思った。

今、世界中のどこかで争いがあるが早く争いが終わるようにと心から祈っている。終り。

令和 6 年 5 月 31 日 寄稿